

# アテネ、ミュケナイを訪ねて

——「トロヤ戦争」期のガラス——

昭和五十三年二月に東京国立博物館で「東洋古代ガラス」展観が催された（二）。オリエント地域・日本・中国・韓国  
のガラス器中に、唯一の例外として、「青色型押し頸飾。ミノア後期——ミュケナイ期。西紀前十四—十三世紀。クレタ島、ペロポネソス出土。石黒夫妻コレクション（三）」があった。「補助展観の積りで展示したが……人々は妖しい魅力に嘆声を挙げていた。……宝石の代用品としてよりガラス自体の魅力を發揮した遺物……」と解説された。同品は平成二年に町田市立博物館でベルシヤ出土ガラスと共に再び展観された（三）。

「トロヤ戦争」はギリシヤのペロポネソスを中心とした地域の領主・英雄達が、ミュケナイの領主アガムノンを総大将としてエーゲ海対岸のトロヤを攻め、十年の攻防の末に落城・炎上させたという伝承で、その最後のクライマックスの時期がホメロス（前八百年頃？）の詩「イーリ

アス」に唱われた。その時期は前十三世紀頃と伝承される。トロヤの地は第二次ペルシヤ戦役（前四八〇年）の時代まで記憶されており、ベルシヤ王クセルクセスはギリシヤ遠征の途上に、ここで往古の英雄達を祀ってからヘレスポント（現タイゲネルス）海峡を渡

ったという（四）。そのような交通の要衝であった。

ドイツの人シユーリマン（一八二二—一八九〇）は「イーリアス」を史実と信じて発掘に励

## 岸井 貫

（昭和二十二年理甲）



図1 アテネ—ミュケナイ地区図

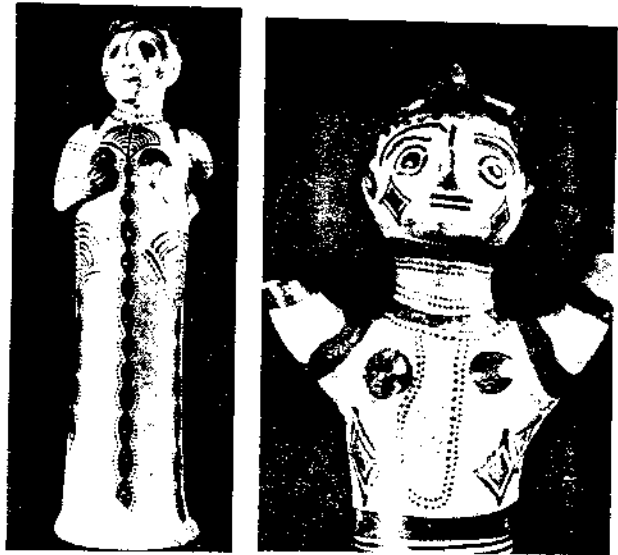


図2 玉飾りを装う婦人土偶  
ミュケナイ出土。文献(六)

み、遂に炎上の後を残し金宝飾品を出土する城市を掘り当てた(一八七三年)(五)。

彼は次にギリシャの英雄達の故市を次々と発見・発掘した。ミュケナイでは五つの黄金の死仮面を始め数十キログラム相当の金製品や貴石宝飾品を得た。婦人の被葬者達は「……頭髮に水晶と貴重なガラスで作った針頭のある大き

な留針を挿し」ていた。ティールュンスでは「壁脚は雪花石膏の透明な白さで輝き……宝石のような青いガラスがきらめく」のを見た(五)。

これらのガラスとかねがね凶鏝で見る仮面を見たくて、アテネの国立考古博物館とミュケナイとを訪ねた(平成二一年九月)。

アテネはゆるやかな起伏が多い中にアクロポリスの丘が聳えるという印象で、博物館はアクロポリスから歩ける距離にある。正面玄関がシュリーマンの発掘遺物展示室入口に正対して、遙かに黄金仮面のいくつかを見られるような配置になっている。

展示室内の説明札には「シュリーマン」の名が見られた。金・銀・青銅(武具類を含む)製品と水晶・紫水晶・瑠璃が多い。「黄金に富むミュケナイ」、「金の時代・銀の時代・銅の時代・英雄の時代」など、古の詩人達によるレトリックが現実と感じられる。当時は「鉄の時代」はまだであった。直径四センチ位の水晶玉を附けたピンも探し当てた。

玉飾り類は多かつたけれども、櫛の外側からでは貴石か濃色不透明ガラスか判断できない。凶鏝ではミュケナイ出土の婦人像が長い玉飾りを装っている(六)。日本の古墳で貴石・ガラスの玉飾りが出土し、同時に人物埴輪が玉飾りをかけていることを連想させる。両国の婦人達の間で表情も似ているような気がする。

なお例の水晶玉のピンについては、「女王の所持品の中には……特に長い重い水晶の頭のついたピンは頭髪用ではあり得ず……長い衣服の肩を留めるものと言われる(七)。」

この展示室の両隣りはそれぞれ「先ミュケナイ期」、「キュクラテス期(新石器時代)」のための部屋であった。

別の部屋では「トロヤ・ミュケナイ・ティーリユンス・オルコメノス・シュリーマン没後百年」展が準備されていた。展示品のリストを調べると、ガラス製品は玉類・ペンダント・ガラス象嵌の金環と金属板と短剣・ガラスをエナメル掛けした指輪など数十点。さらにガラス製品を作るための石の鑄型もある。

年代の手掛かりになる遺物は、エジプトのラムセス二世(前十三世紀に在位)・アメノフィス二世・三世(前十四世紀)のそれぞれの王銘を持つファイアンス(石粉にソーダを混じ焼結した材料)製猿・花瓶・甲虫形護符であり、黄金の仮面とともにエジプトを媒にしてミュケナイの实在を感じさせる。シュリーマン自身ヨーロッパの多くの博物館で遺品と自分の発掘品との対応を検討していたが、その晩年の頃に、比較年代学の最初の適用例となってミュケナイの年代が決められた(八)。また彼もクレタ島・エジプト方面への関心を持ったが、発掘を実現するには至らなかった。次の朝はミュケナイへ行くために国鉄のペロポネソス駅へ行った。繁華街からは外れてのどかな雰囲気、プラ

ットフォームには大きいリュックサックを携えた若者達が何人が寝袋にくるまっている。レールは広狭軌兼用の三本一組であった。

列車はエレウシス・メガラなどベルシャ戦役に出る地名の駅を経て行く。左手が海で、次々に現われる港々にはタンカーが碇泊し、精油所・貯油槽・造船所・製鉄所がそれぞれたびたび現われて、此の国の産業構造の一端を示すようだ。

逆光の中にしばらくサラミスの大きな鳥影が続く。サラミスの海戦はその裏側で戦われた筈である。ペルシヤ陸軍はアテネを占領しアクロポリスを破壊しながらも、海軍の大敗で撤退・帰国を余儀なくされ、一部の残留部隊も翌年右



図3 コリント運河

手に当るプラタイアイの会戦で潰滅して、ペルシャ戦役は終った。

沿線の教会では墓地に大理石の墓標が立ち並ぶ。季節のせいとか麦の畑は見えなくて、ぶどう・柑橘類の畑と、少ないが煙草・びわ。畑の隅や斜面にオリーブ。名前を知らない果実の畑もあった。

コリントに近づくると運河が口を開けているのに驚いた。

古来切り開くことが企てられながら未だに実現しないと思つていたのは私の認識不足であつた。並行する別の橋の上では見物人が群がっていた。十九世紀末に開通したことを後で知つた。

ペロポネソスに入ると山地が多くなり、オリーブ畑の中に人家がまばらな景色の中を走つてミュケナイ駅へ着いた。駅舎にはギリシャ文字とローマ字とで駅名が表示されていた。駅の近くの人家は数軒あるだけの静かさで人影が無く、北側へ出て、古代陶器の模製品と土産物を売る店まで道を聞く必要があつた。

東南方への道は喬木に夾竹桃が添えられて並木になつていた。スコットランドの歴史科学生という若者と道連れになつたのは良いが、長いコンパスを追うのに一生懸命になつた。

登り坂になり、宿屋と土産物店とがかたまつた集落に着く。屋号はメネラオス・オレステス・イフゲーニヤ・美し

いヘレーネ・クリュタイムネストラ・シュリーマンなど。

「アイギストス」は無かつた。ミュケナイ出土の粘土板文書に「ヘクトル」・「アキレウス」が住民の名として解説されたという研究史が想い出される。観光シーズンでないためか、店の人達が我々を呼び込むことはなかつた。

三キロ位の道のりと思うが、二つの山を背負う丘の上に遺跡が見えて来た。日本で安土の城壁を見た時と同じに、幻の城が眼前に現われたという感じがした。しかし遺跡に着くと車・観光バスが駐車場にあり、多くの観光客が居て雰囲気はかなり違う。南のアルゴス湾から来る道が別にあるからであろう。

丸い一眼を持つ巨人達が大きな石で城壁を築いたとの伝説があると言うが、日本の城と比べて際立つた印象はない。入場料を払つて柵内へ入る。学生は証明書を見せて割引で入る交渉をしたが、なかなか納得されないようであつた。別れて先へ行き獅子門へ向かう。二頭の獅子が、頭は無くなつて、向き合つて彫られている。門をくぐるとシュリーマンが発見した円形墓地Aである(別に戦後発見された円形墓地Bがある)。門も墓もあらかた埋まつていたシュリーマンの時代を想像するのが難しいくらいである。

最高所のアクロポリス跡は南と西に眺めが開けている。快晴でやや風があり、遠くにアルゴス湾が少し霞んで見える。ティーリユンヌスも視界の中にある筈である。周囲はオ



図4 ミュケナイ遺跡遠望  
(民家のすぐ上方)



図5 ミュケナイ遺跡



図6 円形墓地A



図7 把手付上瓶。高さ7.6cm。  
ペロポネソス出土、  
ミュケナイIII B期。  
文献(十)から作図。

リープを疎らに植えた畑であった。

高い山を背負った小高い丘は、要害であると共に水利も良かったのであろう。暗くて懐中電灯が無いと降りられない井戸への地下道があった。小さな部屋割の壁を崩れ残して瓶の残骸が転がる蔵の跡が、僅かながら生活の匂いを感じさせた。石の間には背の低い草が花を着けていた。

遺跡からの帰りは一人で同じ道を下って行った。あの集落を過ぎるとまた城塞が小さく見え出したが、背景とは見分け難い。日はまだ高かった。

シュリーマンの「トロヤ」は、その後の環エーゲ海地域

の発掘進展とともに、ミュケナイとの同時性に疑問が出て再検討された。最終的な結論は戦後に、陶器様式の丹念な解析・分類・編年で得られた(九)。シュリーマンの「トロヤ」は前二千年の前後であり、ホメロスの「トロヤ」はそれよりも上の層に、混乱の中に焼亡した跡を見せて同定された。従ってシュリーマンによるトロヤの遺物は博物館では先ミュケナイ期に分類された。ジュネーブ美術博物館はこれらの編年の研究に使われたミュケナイ期陶器のコレクションを収蔵している(十)。

ギリシャ軍との戦の真偽は別として(史実とする考えも有力である(十二)、ヘレスポントを扼するトロヤが襲われて、炎上する煙が海上遙かに、または海峡から望見されたのであろうか。その記憶が、数百

年の間に「イーリアス」の舞台として、詩想のもととなつたかも知れない。

(一) 『東洋古代ガラス——東西交渉史の視点から』 東京国立博物館

(二) 『古代ガラス蒐集の思い出』 石黒孝次郎 「別冊太陽」四十三号 平凡社

(三) 『オリエントのガラス』 町田市立博物館

(四) 『ヘロドトス』 歴史(下) 松平千秋訳 岩波文庫

(五) 『古代への情熱——シュリーマン自伝』 村田数之亮訳 岩波文庫

(六) 『ミケナイ——エピダウロス』 エクトディケ・アテノン社

(七) 『ホメーロスの英雄叙事詩』 高津春繁 岩波新書

(八) 『文明の誕生』 C・レンフルー 大貫良夫訳 岩波現代選書

(九) 『英雄伝説を掘る』 村田数之亮 新潮社

(十) 『ミケナイ期陶器類』 ジュネーブ美術歴史博物館

(十一) 『ホメーロス』 『イーリアス(上)』 吳茂一訳および解題 岩波文庫

### 岩元禎の人間像(3)

次に『向陵』一高百年記念号(昭和四十九年十月)から一部を紹介する。

「哲学とは有限の實在たる人類が無限の宇宙を包括せんとする企図なり。既に有限を以て無限に對す、恰も水面の月影を掬するが如く、其之を包括するの不可能なる事昭々として明なり。」哲学概論冒頭の先生の言葉で……。先生は雑書を涉獵することを嚴重に戒められた。本當に哲学に志すならクローノー・フィッシャー。その頃先生はよく杜甫を読んでおられた。……漱石などになると全然眼中にない。「夏日は英語はできるんじやが、あとでつまらんものを書きおつてのう。……」ということだ。新渡戸博士はお氣に入らなかつたのだから。「サーターリザータスをふりまわして騒々しかったよ」と述懐しておられた。逆に狩野亨吉博士や漢学の安井小太郎先生、英語の和田正幾先生の学識と人格とは敬服しておられた。……私は学問はものにならなかつたが、先生の警咳に接して哲人の本領を窺知できたことは、生涯の至幸と、いまだに有難く思っている。」  
長谷川才次(大正十三年文甲)